交換学生プログラム・願書提出から派遣までの現況説明
及び送り出すにあたっての気づき等

青少年奉仕委員会　委員長　櫻井忠久

【青少年奉仕委員会　櫻井委員長からご紹介】

皆さんこんにちは。青少年奉仕委員会　委員長　櫻井です。
皆さんに配布しました紹介書に記載あります。88 年から 89 年度船橋 RC からカナダに派遣しました旧姓藤井さんです。
お母さんとそよ花さんです。今度娘さんが留学することになりましたので、本日は交換学生がどういう現状なのか？また、お母さんから見て送り出す心境など、経験を踏まえてのリアルな生の声をお聞かせ貰いたいです。よろしくお願いします。

【卓話１　そよ花様】

はじめまして、阿部そよ花です。
この度、国際ロータリー第 2790 地区青少年交換プログラム、2024 年度派遣生として、アメリカのイリノイ州南部に８月に出発の予定です。
スポンサークラブは成田コスモポリタンロータリークラブ、ホストクラブは６510 地区のオファロンサンライズロータリークラブです。
まず最初に自己紹介をさせてください。私は、現在、日出学園高等学校２年生です。私の家には、私が小さな頃から留学生がよくホームステイをしていました。私自身、両親に連れられて海外のご家庭を訪ねたり、また、兄や姉が留学していたこともあり、私も自然に海外に興味を持ち、中学３年生の時には７ヶ月間カナダに留学しました。これは、その時バスケットボールで、ブリティッシュ・コロンビア州のチャンピオンシップに出場した時のポスターです。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
私からは、「青少年交換学生として願書提出から現在までの経過」ということでしたので、現時点までの流れをお話しさせて頂き、その後、母にバトンタッチします。

私が、ロータリーの交換プログラムに興味を持ったのは、カナダ留学から帰国した高校生入学前の春休みでした。私は、カナダでは grade9、日本で言う中学３年生の学年に入りました。その時のカナダでの７ヶ月間は、いわば海外経験と語学力アップのため、自分自身のための留学でした。けれど、この経験をもとに、もっと深く国際交流に挑んでみたいと強く思うようになりました。

日本を知ってもらうこと、相手の国を知ること、そして色々な国から留学に来ている多くの学生たちの母国を知ること、それらが「国際理解」と「世界平和」の第一歩になると思ったからです。

カナダから帰国してすぐにロータリー青少年交換プログラムに関する情報集めを始めました。その年度の募集要項のパンフレットがアップされる期間はとても短く、頻繁に情報がアップされるのをインターネットでチェックしました。また、アップされてからは、直ぐに委員会への志願の意思を伝え、そこから志願書を実際に提出させていただくまでは本当に大変でした。

「スポンサークラブを自ら選定してください。千葉県内にある８２のロータリークラブに直接問い合わせてください」とされているからです。２ヶ月足らずで、スポンサーを引き受けてくださるクラブを自分で探さなければならないことは、本当にとても難しかったです。

手紙やメールをいくつかのクラブに送り自分の意志を伝えましたが、実際にご返信をいただけたクラブは１つもありませんでした。どのクラブからもご返信のないままに、時間ばかりが過ぎていき、最終的に成田コスモポリタンロータリークラブがスポンサーとして引き受けてくださったのは、締め切り直前でした。ほぼ諦めの境地にいましたので、良いお返事を戴いた時は、本当に嬉しかったです。

そこにたどり着くことができましたのは、船橋ロータリークラブの狩野様をはじめ役員の皆さま、船橋東ロータリークラブの山崎様と皆さま、そして、成田コスモポリタンロータリークラブの青木学園長と会長、会員の皆様のおかげです。ありがとうございます。

このような流れでスポンサークラブが決まり、８月半ばに無事志願書を提出することができました。

その後、９月に選考試験がありました。内容は英語・数学・一般常識の筆記試験、英語・日本語の面接試験、そしてスポンサークラブ担当者と両親が受ける役員面接です。そして、合格通知をいただき、晴れて「候補生」となることができました。

そこからは、毎月のオリエンテーションがあり、毎回必ずプレゼンテーションがあります。オリエンテーションを通じて、ロータリー交換学生としての意

識を高めるとともに、日本について知識を得ることの大切さを感じ、同期やＲOTEX メンバーとの仲間としての絆を少しずつ築けたように思います。
　オリエンテーション以外には、地区大会、RYLA セミナー、そして金沢へスプリングキャンプがありました。RYLA セミナーでは、性別や世代を超え、立場の異なる方々とランダムにグループが編成されていて、課題解決に向け自然の中でウォークラリーをしました。毎日２万歩以上歩きまわり、まさに体力勝負のセミナーでしたが、とても楽しかったです。私は「バスケットボールや筋トレをやっていて本当によかった！」とその時に心の底から思いました。
　先月のオリエンテーションにて派遣先が発表となりました。今年度 2790 地区の候補生８人は、アメリカが２人、あとはカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、スペイン、ブラジル、インドに各１名ずつとなります。ちなみに、行き先が決定してからの辞退は認められません。私の第一希望はアメリカだったので、嬉しかったです。まずは英語をしっかりと習得し、そして大学では第３外国語を学び、今度は英語圏以外の国に留学したいと思っています。
　いよいよ来月、「青少年交換派遣認証書授与式」を経て、「候補生」から「派遣生」となり、８月に出発いたします。それまでに私は、もっと日本のことや、スポンサークラブの位置する地域について、もっと知識を深めたいと思います。

［卓話２ 阿部有紀様］
　こんにちは、そよ花の母、阿部有紀と申します。
　私は、大神宮近くの中村産婦人科で生まれ、峰台小学校、宮本中学校、そして市立船橋高等学校へと進学し、高校在学中 1988 年度ロータリー交換学生として船橋ロータリークラブよりカナダへ一年間留学させていただきました。その経験こそが、私にとって「ターニングポイント」となりました。現在は、「一般社団法人 海外留学協議会（JAOS）留学カウンセラー」の資格を取得し、国内外の留学生のサポート、並びに無償ホストファミリーとしてのボランティア活動をしております。
　今回、私は派遣候補生の保護者という立場ですが、当時と大きく異なる点が何点かあるように思います。
　ひとつ目は、人数と派遣先位ついてです。35 年前は毎年 15 人ほど候補生がおり、そのほとんどがオーストラリア、若しくはニュージーランドというようにオセアニアへの派遣でした。コロナの影響もあったせいか、候補生は昨年は４人、今年は８人、派遣先はここ数年はアメリカが多いような印象を受けます。

次に、派遣先と、受け入れる学生の出身地が異なる、つまり完全に交換とはなっていない点です。そよ花は、今回イリノイ州への派遣ですが、そよ花の交換で来日する学生はミネソタ州から成田コスモポリタンＲＣ、そして我が家にやってきます。35 年前、私とセーラは交換生で、お互いに学校に行って、お互いの家族と過ごすという留学でした。ですが、今回は送り出す地域と来る地域とは全く別という形になっています。

そして、委員会の方々が今はとっても優しいです！私たちの時は「貴方たちはあくまでも候補生という立場だから、いつでも取り消すことができる」と常に言われていました。学校行事よりも、部活よりも何よりも、この青少年プログラムが第一優先！オリエンテーションを休むなんてあり得ない！という形でしたが、今はその辺もだいぶ優しくなってきています。

そして、何よりも大きな違いは、「候補生へのエントリーは狭き門」ということでしょうか？私は、ロータリーの青少年交換プログラムを市船の学食の壁に貼られているチラシで知り、学校によりスポンサークラブが決まっていて、そのチャンスは誰にでも開かれているように思いました。

しかし今は、自ら情報をキャッチし、居住地や学校所在地とは関係なく、自分自身で２７９０地区内８２ロータリークラブからスポンサークラブを選定して初めてエントリーすることができます。その点は、かなりハードルが高いように感じました。

さて、本日私がみなさまに一番お話しさせていただきたいことは、「ロータリー青少年交換留学だからこそ得られるもの」とは何か？それは、大きく分けて２つあります。

先ずひとつ目は、「人と人とのつながり」です。

17 歳でカナダへ留学し、帰国してから３０年以上経ちますが、当時のホストファミリーとは今なお本当の家族のような関係と保ち、それが私たちお互いの子供達同士にまでつながっています。

また、カナダの人だけではなく、同じようにロータリー交換学生としてカナダに留学している世界各国からの留学生と意見交換する機会がありました。これは本当に貴重な体験だったと思います。

実際、ロータリーの交換でアメリカに留学する時は、「学生ビザ」ではなく「国際親善大使」としてのビザが発給されるというところで、普通の留学とロータリーの留学は全く別のものだと分けられています。

そして国内では、2790 地区の世代を超えた ROTEX メンバー、帰ってきたメンバーがもう 50 歳を過ぎて、おじさんおばさんになっても、やはり当時

の話をしたり、今の仕事の情報交換をしたり、とても仲の良い関係を保っています。
　ロータリーを通じていろいろなところで出来たこの絆こそが、かけがえのない宝物です。

　次にもうひとつ、ロータリークラブによる留学だからこそ得られるもの、それは「安心・安全」です。
　私は、子供たち３人を個人で留学させたのですが、その時に気づいたことは「離れた異国にいる我が子の安全と健康を心配するほど、親として辛く、もどかしいことはない」ということです。
　ロータリーにおける責任感や奉仕の精神というものが、どれほどの安心感を与え、どれほどありがたいことなのかを、親として身をもって知りました。
　ここでひとつ、私のホストファミリー体験をお話しさせてください。９年前、フィンランドからの留学生のホストファミリーを無償で１年間引き受けました。私自身、ロータリー交換プログラムで複数のホストファミリーと過ごせたことがとても良かったという思いもあり、私は、彼女の最後の２ヶ月間を他の日本の家族と暮らすように、引っ越しを提案いたしました。「彼女のため」と言いながらも、常に私は彼女をどこかに連れていかなければ…という思いに、少し負担を感じていたのかもしれません。
　彼女の最後の２ヶ月間の日本滞在は、新しいホストファミリーに毎週のように観光に連れて行ってもらっていて、私は「彼女にとって、それが最良であった」という気持ちでいました。しかし、彼女がフィンランドに帰国する時、空港で言ってくれた言葉、それは「日本でいちばん楽しかった時間は、阿部家のリビングで兄妹とふざけ合ったり、テレビを見たり、私はその時間が一番好きだった」と。
　彼女が何よりも望んでいたものは、休みの日ごとにどこかへ連れて行ってもらうことではなく、家族と過ごす時間であったと気づかせてもらったのです。
　「私は、ツアーコンダクターではなく日本のお母さん。そして留学生の最大の目的は観光旅行ではなく国際交流と異文化体験」そのことを改めて認識し、ホストファミリーは、あまり気負いすぎず、留学生を「お客様」ではなく「家族の一員」として受け入れていくことが大切だと思うようになりました。
　フィンランドの学生をお預かりした時、そよ花は小学２年生でした。その後、いろいろな国からの留学生をお預かりしましたが、その中でも、南アフリカからの学生を受け入れた際に、そよ花は、「世界幸福度ランキング１位のフィンランドと、下位５位以内の南アフリカは何が違うのだろう？日本はどうな

のだろう？」と考えたことが、外国への興味と、世界に目を向けることへの第一歩となったように思います。
　高校生になった今、ロータリー青少年交換学生として、娘が１年間どのようなことを感じ、学んでくるのか、私はとても楽しみにしています。

　最後になりますが、私が 35 年前、ホストマザーから戴いた忘れられない言葉があります。それを紹介させてください。
　「もしこの先、世界の国同士の仲が悪くなるようなことがあったとして、そしてもし日本を悪くいう人がいたとしても、私は、日本は素晴らしい国だ！と伝えたい。私は日本に行ったことがないけど、日本が大好きだと言える。それはなぜか？私にとっての日本、その全ては Yuki、貴方だから」と。
　これからロータリー青少年交換学生として外国に旅立つ娘そよ花に私が今伝えたいことは、彼女自身の行動全てが外国では「日本」として映るのだということを自覚し、日本の代表という意識を持ちながら自分にできる国際交流を精一杯楽しんできてほしいと思います。
　本日は、私たち親子にこのようなお時間をいただき、ありがとうございました。

　最後に、そよ花と交換で来日する学生はテニス部でキャプテンをしている１６歳の男の子がアメリカから来ます。現在ホストファミリー大募集中です。もしご興味ある方がいらっしゃったら、日の出学園に通いますので船橋からでしたら近いですので、是非、よろしくお願い致します。
ありがとうございました。